

三業莊嚴

お念仏するということは、本願の御意に帰ることである。如来の大慈悲の御意に帰入することである。であるから、お念仏のことを、信心と云ったり、憶念と云ったりするのである。

如来の御心に帰る者は、如来の御心に生きるものであり、その清淨真実の御心に生かされるものである。であるから、お浄土の心は念仏の人において生きて下さるのである。蓮如上人が御一代かけて「信心をとれ信心をとれ」と教えて下さったのも、そのためである。「信心治定の人は誰によらず、まず見れば、すなはちたふとくなり候。是れその人のたふとときに非ず。仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有り難き程を存すべき事なり。」(御一代聞書)

誠にその通りである。真に信心治定の人は、誰でも尊く拜まれる。しかしそれは、仏智、念仏のうちに光る仏智の然らしめたまうのである。だから弥陀の仏智の有難き程を存すべきである。有難く感ずれば、感ずるほど、それが又その人の上に光となるのである。

愚痴を言うて回るものは、その理由の如何にかかわらず、人が嫌ふ。念仏の人は、唯存在するだけで人が喜ぶ。しかしこのたつた一二行に書いてしまわれるほどの事が真に生きて来るのはなかなかでない。一念仏相続によって成就するのである。腹の立つことがある。しかしよくよく心に言つて聞かしておくことである。理由の如何によらず、その腹を立てていることが、如来に相すまぬことであり、自分に相すまぬことである。よくよく内観の一道をたどつて、久遠の親心に帰るべきである。なるべく早く、本願の御心に帰つて、廻心懺悔して念仏すべきである。

昨夜本部の例会では、

「諸佛三業莊嚴して 畢竟平等なることは

衆生虚誑こおろの身口意を 治せんがためとのべたまふ。」

という御和讃について頂いた。

諸仏というのは弥陀のことである。諸仏を弥陀と言うのは、三世の諸仏、十方の諸仏の功德を全うじての弥陀仏だからである。弥陀の智慧光そのままの諸仏であるから、弥陀のことを諸仏と現わされたのである。この例は多く使つてあることで、譬えば、大無量寿経に、

「其れ菩薩ありて疑惑を生ずる者は大利を失ふと為す。是の故に当に明らかに諸仏無上の智慧を信ずべし」とあるのも諸仏とは弥陀のことである。

「諸仏三業莊嚴して」身、口、意の三業、諸の悪を離れて、三業を清淨に成就することを三業莊嚴というのである。法華文句には「五根の清淨を外の莊嚴と名け、意根の清淨を内の莊嚴と名く。」とあり、眼や、耳や、鼻や、口や、身が、清淨真実であることを、外の莊嚴といい、意が清淨であることを内の莊嚴というのである。

阿弥陀仏は兆載永劫の間、身には、「三宝を恭敬し、師長に奉事し」て、尊い徳を積んで自ら身業を莊嚴せられ、口業には、「麁言そごの自害、害彼、彼此俱害を遠離し、善語の自利、利人、人我兼利を修習す」と、善い語によつて口業を莊嚴し、意業には「欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲望、瞋想、害想を起さず……」と、尊い智慧の光によつて、意業を莊嚴せられたと説いてある。これを頂かれた聖人は「三業の所修、一念一利邪も清浄ならざる無く、真心ならざる無し。如来、清浄の真心を以つて、円融、無碍、不可思議、不可称、不可説の至徳を成就したまへり。」と説かれた。

如来は清浄真実そのものにてまします。それを畢竟平等といわれる。久遠から永劫かけて、終始一貫、一味平等、是非、善悪、好醜、男女、智愚等によつて分別し差別したまうことなき、永遠に平等なる真実なるが故に「諸仏三業莊嚴して、畢竟平等なることは」と讃えられたのである。

人間は、間違つた判断の上に立ちつつ、善人だから近づけ、悪人だからとて遠ざけ、好きだ嫌いだと差別し、是非善悪を主張して、遂に自らの三業の垢づき、穢く汚れていることを知らないものである。しかし、その中にありつつ、それでは満されないで、魂の底には何か一つのものを探めている。猫の眼のように変わる世の人の心に、我が心に、気づいた者は、永遠に変わらぬもの、一切に平等なるものを求めはじめたのではあるまいか。煩惱はあくまで、自分だけに都合のいい差別待遇を受けたいと求める。

しかし、如来超世の本願を聞きはじめると、清浄なるものを求める心を恵んで下さる。清浄なるものとは平等なるものごとである。畢竟平等なる心の尊さがしのばれて来る。世の嫌な声、俺を踏みつけた、わしを馬鹿にした、親切でない等と、騒々しい人間の声の全てが、じつと耳をすますと、皆差別を求める声ではないか。

貪欲中心の声は穢い。自己の内心にも、この煩惱が、貪愛、瞋憎の雲霧となつて、信心の天を覆うている。平等の御心をさえぎっているではないか。しかし如来清浄真実の平等のみ光は、この雲霧を照し出し、照破して、平等の御心の尊さに合掌せずにはいられなくして下さる。これ即ち念仏の心である。

「諸仏三業莊嚴して畢竟平等なることは 衆生虚誑こおやうの身口意を治せんがためとのおべたまう。」

衆生の身、口、意は「虚誑」である。虚誑とは、御草稿の左訓には「ムナシ、クルウ、アクゴフボムナウノココロナリ」とあり、虚とは、むなしということ、虚偽と綴れば、うそといふこと、誑という字は、いつわる、たぶらかす、あざむくという意味の字である。衆生の三業は、まことに、うそいつはりによつて狂うているのである。時々間違いがあるのでなく、三業すべてが、狂うているのであり、うそであり「むなし」ものである。終日語るを聞いてもむなしなことばかりである。

それ自体の全てがむなしと思われなくて、時々間違いがあると思われる人は、道徳の世界や、自力聖道の世界にとどまることも出来よう。三業のすべてが、その根本から、むなしく価値のないことに気づくものは、全体を治し、たすけて下さるお力の前に合掌せずにはいられない。

私自体は正しい。私自体がする判断も正しい。何時かした悪は、あれは一時の過である。何時か人を悪く言ったが、後になつて、あれは私の誤解とわかった。しかし私自体は正しい。こうした考え方にいる限りは、この聖人の「衆生虚誑の身口意」という言は受け取れない。猫のしていることは、途に猫を出でない。凡夫の一切は凡夫を出でない。悪業煩惱の全体が意業となり、身業となり、口業となる、その全てを治せんが為の如来の三業莊嚴であることを示されるのである。

曇鸞大師は、論註下に、

「凡夫衆生の身口意の三業、罪を造るを以つて、三界に輪転して窮り已むこと有ることなし。是の故に諸佛菩薩、身口意の三業を莊嚴して用ひて、衆生虚誑の三業を治したまうなり。」

と仰せられた。この『論註』の御文が、和讃となつたのである。

諸仏菩薩とあるのは、諸仏とは弥陀仏のこと、菩薩とは浄土の菩薩のこと、主(仏)伴(菩薩) 平等の三業成就を、浄土の衆生世間清浄と言われるのである。

浄土を背景として、人生に現われて下さった方々は、皆、身業には、合掌恭敬し、意業には、仏を憶念し、口業には、仏の名号を讃して、平等の三業を莊嚴しつつ、我が前にお立ち下さるのである。誠に聖者菩薩大士の三業こそは、暗の世の燈明であり、生死の海の船であり、生死の大河の橋である。こうした一切の諸仏菩薩の智慧功德も、全ては主徳即ち弥陀の徳に帰せられるのである。我々はこの三業を全うじての教の前に聞かねばならない。

聞其名号信心歡喜、真実の教を通して、本仏弥陀の招喚の声に一心の安心を得させて頂くのである。この真実信心の一心は、如来の全てが、衆生の上に廻向せられて成就されるのであるが故に、この一心は、如来浄土の一切莊嚴功德を、その全てを尽して成就せられた一心である。如来三業莊嚴の全てによつて成就せられた一心であるが故に他力と言われるのである。

多くの人は、如来を私が信ずるのだとする。それだから如来は尊いが、私にはまだ信心があるのなのとと言う。こうした信心や一心は凡夫心の動きで無内容である。一心をおこして如来に向うのではない。如来の全てが一心となるのである。であるからこそ、真実の一心には、無限の力と功德を含蓄するのである。この一心に内在する如来三業莊嚴の徳は、一心の行者の上に発露して、礼拝、讚嘆、作願と、身口意の三業となつて下さるのである。畢竟平等なる如来の三業は、衆生の虚誑の身口意を助けんがためであり、尊く成就せんが為である。かくして如来の本願は、一切衆生の為に本願一乗となつて下さるのである。